



巻頭言

保育者であること

その生と死を生きる

榎沢 良彦

「保育者であること」は、どのようなことなのだろうか。一般に、世間の人に「保育者とは何か」と問えば、「子どもと一緒に遊ぶ人」等という素朴な答えが返ってくるだろう。既に保育者として働いている人なら、「子ども一人ひとりの自己実現を支えながらその発達を促す人」というように、より詳しい答えをするだろう。認識の程度に違いはあるものの、両者に共通していることは、「保育者の業務」「職業としての役割」に注目している点である。その点に関する答えとしては、「両者とも正しいといえる。しかし、これらの答えは、冒頭に掲げた「保育者であることとはどういうことか」という問の答えではない。この問は、保育者の業務や役割を聞いているのではなく、保育者として生きることそれ自体が何を意味するのか、あるいは、保育者であることがいかにして可能であるのかを問題にしているのである。



この「保育者であることの意味」の間に對しては、世間の人は勿論のこと、既に保育者として働いている人も容易には答えられないだろう。何故なら、日常生活においては私たちは、あらゆるものに関して、それが本当に存在するか否かは問題にせず、それがもつ特質や特徴を問題にするからである。それ故、保育者に関しても、私たちの関心は業務や役割に向けられ、いかにして保育者でありえるかという問題には向けられないのである。

保育者の業務や役割を詳しく理解することは大事なことではある。しかし、自分がいかにして保育者でありえるかを問うことなく、自分が保育者であることを自明であると思ひ込むことは、無自覚の内に、子どもを「固有の生を営む主体」から「働きかけられるだけの客体」へと変えてしまうことにつながる。すなわち、子どもに對してどのような態度を取ろうが、何をどのように行おうが、それは保育者として行つてどのようになると、合理化されるのである。このような事態を回避するには、自明と思ひ込んでいくことが自体を問うことが必要である。

さて、幼稚園教員の免許や保育士資格をもっている人は、免許・資格を有している故に保育者なのだろうか。また、実際に幼稚園や保育所で保育者として働いている人は、その理由だけで保育者といえるのだろうか。資格をもっていることや保育者という職業に就いていることと、私がいま保育者として生きていることとは違ふ。では、そもそも私が保育者であることの根源は、一体どこにあるのだろうか。



資格をもつていようが、職業に就いていようが、子どもと出会うことがない限り、私たちは保育者としての実感をもつことはできない。すなわち、保育者であることの根源は子どもとの出会いにあるのである。「出会い」とは出来事であり、もののようにいつまでもそこにあり続けることはない。出会いは生成消滅するものである。従って、子どもとの出会いと共に始まる「保育者であること」も、生成消滅するものである。すなわち、私たちが保育者であることは、決して確定した事実ではないのである。私たちは、朝、子どもと出会うことで保育者として生まれ、子どもと別れることで保育者として死ぬ。保育者であることはこのような生と死を繰り返し体験し、そのこと自体を生きることなのである。

このことは、保育者として生きようとする者にとって重要な意味をもつ。真に保育者として生きようとする者は、日々、そしてその都度、子どもと出会うとする意志をもたなければならぬ。このとき、私たちは真に保育者であることの充実感を抱き、かつ、自分らしく生きることができぬ。

ハイデガーは、日常生活では人はまわりの出来事に一喜一憂し、人の評価を気にし、本当の自分を見失っていると指摘した。そして、人にとって死が宿命であることを自覚したとき、人は自己本来的に生きる（自分らしく生きる）ことができるという。このことは、保育者であることにそのまま当てはまる。保育者にとって保育者としての死が宿命であることを自覚するとき、保育者は自分らしく生き始められるのである。



では、保育者としての自己本来的な生き方を可能にする「子どもとの出会い」とは、一体どのような出来事なのだろうか。出会いにおいては、私たちは完全に対等な存在である。出会おうとする者は、まず互いにまなざし合わなければならぬ。そして、そのまなざしは、相手がそこに或る者として存在することを承認するまなざしでなければならぬ。子どもと保育者は互いのまなざしの下に、それぞれそのような者として存在する。すなわち、保育者は子どものまなざしの下に、「保育者」として生まれ出るのであり、子どもも同様である。その意味で、両者は完全に対等なのである。

私たちは子どもと出会うことで、保育者として生まれるという根源に立ち返り、保育者であることが生成であることに気づき、自己本来的に生き始めるのである。従って、私たちが日常性の中に見失っている自己を取り戻し、保育者としての自己本来的な生き方に返るためには、子どもと出会おうとする意志が不可欠であるといえる。

津守真は、著書『子どもの世界をどうみるか』（日本放送出版協会）の中で、「きょうの一日を子どもとともに過ごそうと覚悟をきめる」（一一八頁）と述べている。津守はこの覚悟の下に、子どもの世界と出会う。子どもの世界と出会う前提に覚悟があることは、保育者であることを自明として日常性を生きている者にとっては、真に子どもと出会うことは難しいことを意味する。出会おうとする意志や覚悟は無からは生まれぬ。保育者としての自己の生と死を自覚することが、私たちが子どもと出会うための始点なのである。

（淑徳大学）